

17世紀の日本語の母音オとオ段について —朝鮮の中国語学習書におけるㄅ (o) の音注を中心に—

中山 めぐみ

キーワード： 『捷解新語』原刊本、朝鮮の中国語学習書、円唇母音、母音交替

要旨

17世紀はじめのキリシタン資料の表記から、当時の日本語の母音オは[ɸo]、オ段は[-o]と発音されたと考えられているが、朝鮮の日本語学習書『捷解新語』原刊本(1676)では、オとオ段はどちらもㄅ (o) で表記されている。この点について、先行研究では、ㄅ (o) は [ɸo] と [-o] の両方を表し得たという説があるが、本論では、朝鮮の中国語学習書におけるㄅ (o) の音注がこの説を支持することを論ずる。

1. はじめに

日本語の音韻の歴史を考える時、17世紀という時期は極めて重要な時期である。この時期の音韻変化を経て、現代日本語の音韻体系が出来上がったからである。ハ行子音の両唇音から喉音への移行、入声[t]の開音節化、オ段長音開合の区別の消滅、四つ仮名の混同など、枚挙に暇ない。そして、幸いなことに、17世紀初めにイエズス会の宣教師たちが作成した日本語の辞書や文法書、物語などのキリシタン資料は、音韻変化する直前の姿をローマ字で示してくれている。

キリシタン資料よりも半世紀以上後の1676年に出版された朝鮮の日本語学習書『捷解新語』原刊本（以下「原刊本」）も、当時の日本語の姿を示す貴重な資料である。『捷解新語』は日本語の通訳官養成のために作成された日本語学習書で、日本語の音が平仮名と対応させながらハングルで表されている。著者は晋州出身の康遇聖（1581～没年不詳）という人物で、1592年に文禄の役で捉えられて約10年間日本で捕虜生活を送った後帰還し、科挙の訳科倭学に合格後、釜山で日本語教育に携わった。さらに、3回の朝鮮通信使随行の経験も持ち²、語学の面でも、日朝関係の知識においても、日本語学習書

¹ 本論は、筆者が平成10(1998)年度に提出した麗澤大学大学院修士論文（指導教員、故梅田博之先生）の一部に依拠して執筆した『『捷解新語』原刊本のハングル音注—ハ行・母音オおよびエ段について—』（『麗澤大学大学院言語教育研究科年報』第2号、2000.3、pp.13-32）を、後日梅田先生に引き続きご指導いただいて全面的に書き直したもののうち、母音オとオ段に関する部分を取り出してまとめたものである。

² 1617年（第二回）、1624年（第三回）、1636年（第四回）に渡日。

を作成するのに十分な実力を備えていた³。

『捷解新語』はキリシタン資料より出版時期が遅いことから、音韻変化のより進んだ姿を示している可能性が高いが、キリシタン資料のローマ字が日本語の音韻に従って整然と日本語を写しているのに対して、『捷解新語』のハングル音注は理解しづらい表記がしばしば見られる。これには二つの要因がある。第一の要因は、韓国語では語頭に濁音が現れないので日本語の語頭の濁音を表す文字もないというように、韓国語の音韻体系が当時から日本語の音韻体系と大きく異なっていたことである。第二の要因は、『捷解新語』の制作者が音韻という枠に捉われずに、日本語の音により忠実に表記しようとしたため、キリシタン資料で捨象された異音を拾ったと考えられることである。『捷解新語』のハングル音注には、キリシタン資料のローマ字からは見出せない、当時の日本語の現実を知る手がかりが隠れている可能性があり、それがこの資料の魅力である。

本論では、17世紀の日本語の母音オとオ段の音について、『捷解新語』原刊本のハングル音注を中心に考察する。原刊本は1676年に活字本として刊行され、1699年には木版本も出ている。1748年に第一次改訂版である『改修捷解新語』(以下「改修本」)が出版された。その約15年後には第二次改訂版が出版されたが、散逸してしまい、1781年に復刻本(以下「重刊本」)が刊行された。本論で扱う対象は「原刊本」⁴の音注であるが、考察の参考として、「改修本」「重刊本」の表記にも必要に応じて触れる。

2. 母音オとオ段の問題について

日本語のオは、院政期以降、「オ」「ヲ」そして語中語尾の「ホ」が合一する過程で[uo]となっていたと言われている⁵。17世紀初めに出版されたキリシタン資料においてもオ、ヲ、語中のホは vo、uo と表記されており、院政期の状況が続いていたと考えられる。ロドリゲスの『日本大文典』(1604-1608)には以下の説明がある。

○Va (ワ)、Vo (ヲ) の綴字に於いて V の字は本来子音ではない。従って我々の Va のやうに、唇を強く打って発音してはならない。それとは違った方法で、V にいくらか触れて A 又は O に落着くやうな、子音と母音とのほぼ中間にあたる発音のしかたをしなければならない。

(ロドリゲス、ジョアン原著、土井忠生訳註 1955 : 230)

³ ただし、ハングル音注の制作に関しては、出版時の年齢などからして著者本人ではない可能性が高い。複数の方が関係したとする説もある。李康民(1991 : 46)は、巻による音注の偏りからして「本書の音注を同一人物の手に成ったものと考えられることは出来ない」と指摘している(「本書」とは原刊本のこと)。

⁴ 伝本は、韓国のソウル大学奎章閣に2本(奎1638、奎1639)、日本の東京大学小倉文庫に1本、対馬の宗家文庫に1本ある。

⁵ 外山映次(1972 : 180)には、院政期の僧、東禅院心蓮(1181没)が『悉曇口伝』でア行音の説明として記した「ヲ者以ウ穴呼ウヲ而終ニ開唇即成ヲノ音也」が挙げられている。

ポルトガル語等の[wo]とは異なり、[o]の前に軽く[u]が存在するような、[uo]のような音であると述べられているが、キリシタン資料より 70 年程後に出版された『捷解新語』原刊本では、オ、ヲ、語中のホに対する音注として「o (o)」が当てられている⁶。オ段の表記も「子音+o (o)」となっている。表 1、表 2 は、「原刊本」と『日葡辞書』のオ、ヲ、語中のホ、およびオ段の表記を比較したものである。『日葡辞書』で語頭のオは Vo、語中のオは uo、オ段は「子音+o」で表記されているのと比較されたい。

【表 1】「原刊本」と『日葡辞書』(1603-1604)のオ、ヲ、語中のホの表記

<日本語>	「原刊本」仮名 音注	『日葡辞書』
オ <u>お</u> か (岡・陸)	おか <u>o</u> 가 (’o-ga) (5-17a、他)	<u>Voca</u> .
ヲ <u>かほ</u> を (顔を)	かおお 가 <u>o</u> 가 <u>o</u> ga-’o-’o (3-2b、他)	<u>Cauouo</u>
ホ <u>なほ</u> る (直る)	なおる 나 <u>o</u> 루 na-’o-ru (3-3b)	<u>Nauoru</u> .

【表 2】「原刊本」と『日葡辞書』のオ段の表記

<日本語>	「原刊本」仮名 音注	『日葡辞書』
<u>こ</u> ころ (心)	こころ <u>o</u> 고 <u>o</u> 로 go-go-ro (1-5a、他)	<u>Cocoro</u> .
<u>そ</u> なた (其方)	そなた 소 <u>o</u> 나다 so-na-da (1-18b、他)	<u>Sonata</u> .
<u>の</u> こる (残る)	のこる 노 <u>o</u> 고루 no-go-ru (5-10a、他)	<u>Nocoru</u> .
<u>ほむ</u> しろ (帆蓆)	ほむしろ 호 <u>o</u> 무시로 ho-mu-si-ro (1-11b)	<u>Fomuxiro</u> .
<u>も</u> どす (戻す)	もどす 몬 <u>o</u> 도수 ⁷ mon-do-su (8-4b、他)	<u>Modosu</u> .
<u>よ</u> る (夜)	よる <u>o</u> 루 (’yo-ru) (1-33a、他)	<u>Yoru</u> .

『捷解新語』原刊本と『日葡辞書』の間には 70 年程の間隔があり、オ、ヲ、語中のホ、およびオ段の表記の相違は、この間の日本語の発音の変化によると考えられないこともない。しかし、実際にはその可能性はない。原刊本より 180 年余りに成立した朝鮮板『伊路波』(1492)⁸における表記でも、やはりオ、ヲ (表 3 の「於」「を」の部分)

⁶ o (ローマ字転写では「’」) は頭子音ゼロを表すハングルである。末子音[ŋ]を表すo (ŋ) とフォントの区別が明瞭でないが、o (’) はただのO、o (ŋ) はOの上に短い線が一本出ている。原刊本では音節の位置にかかわらずo (ŋ) の使用は稀で、頭子音、末子音ともにo (’) が使用されている。

⁷ モの音節末のㄴ (n) は次の濁音節に付随するもので、モ自体は모 (mo) である。

⁸ 朝鮮の外国語教育を推進していた司訳院に 15 世紀前半に設置された倭学 (日本語教育機関) で初期に使用されていた日本語学習書の一つ。いろは 47 文字や数字等に一一対一でハングル音注が付いている。

の表記に오 ('o) が用いられているからである^{9, 10, 11}。

【表3】『伊路波』(1492)の母音、半母音の表記¹²

仮名	音注	仮名	音注	仮名	音注
あ	아 ('a)	や	야 ('ya)	わ	와 ('oa)
い	이 (ŋi)			ゐ	이 (ŋi)
う	우 (wu)	ゆ	유 ('yu)		
江	예 ('yæi)			ゑ	예 (ŋyæi)
於	오 ('o)	よ	요 ('yo)	を	오 (ŋo)

【表4】『伊路波』の才段

仮名	音注	仮名	音注	仮名	音注
こ	고 (go)	の	노 (no)	よ	요 ('yo)
そ	소 (so)	ほ	부 (fu)	ろ	로 (ro)
と	도 (do)	も	모 (mo)	を	오 (ŋo)

キリシタン資料でVo、uoと表記され、[uo]のように発音されたと考えられる部分が朝鮮資料で오 ('o)と表記されるのはなぜかが問題となる。

3. 先行研究の検討

『捷解新語』原刊本のㅁ (o)に関する先行研究には、主に次の3つの説がある。第一の説は、日本語の音声変化によるものとする説(Cho, Seung-bog 1970)である。

- ⁹ 『伊路波』ではア行の「い」、ワ行の「ゐ」「ゑ」「を」(表3)に、頭子音ゼロを表す「ㅇ (?)」ではなく、末子音[ŋ]を表す「ㅇ (ŋ)」が使われている。「ㅇ (ŋ)」は、15世紀半ばのハングル創制以降、ŋを表す文字として頭子音にも頻りに使われていたが、16世紀初めにはほぼ末子音にのみ使われていた(李基文著、藤本幸夫訳1975:133)。原刊本の音注にも母音イに1例(2-11a)、半母音ワに5例(1-13b)(1-30a)(3-2a)(9-24b)(9-26b)見られる。詳しい検討は省略するが、これらの朝鮮資料の語頭のㅇ (ŋ)がㅇ (?)と異なる音を表しているとは考えにくいので、本論ではㅇ (ŋ)とㅇ (?)の違いは無視し、すべてㅇ (?)として考えることにする。
- ¹⁰ 『伊路波』の「ほ」(表4)だけは母音がㅁ (u)で表記されているが、これは子音の影響によるものと考えられている。この点については、稿を改めてハ行音を考察する際に扱う。
- ¹¹ 「とう도우 do-'u (十)」(1-24b)、「도우미 do-'u-mi (遠見)」(1-8b、他)のように長音の表記は異なる。長音については別の機会に扱う。
- ¹² ハングルのローマ字転写は河野六郎(1955:367)に拠るが、現代語で使われていないハングルについては河野六郎(1952:33)に拠る。

Cho, Seung-bog (1970 : 86) : ¹³

……I am justified in stating that the merging evolution of the two vowels *wo* and *o* took place in the end of 16th century through the diphthongization of the unit vowel /o/ and the reductive change of *wo* (into [wo]) but that in the early 17th century the diphthongized [wo] was again monophthongized to [o]. (16 世紀末に、ユニット母音/o/¹⁴の二重母音化、および *wo* の ([wo]への) 弱化によって、2つの母音 *wo* と *o* の統合が起きたが、17 世紀初めに、この二重母音化した[wo]が再び単母音化して[o]になった、とするのが妥当であろう。)

しかし、これでは 15 世紀末の『伊路波』ですでに오 ('o) と表記されていることに対して説明がつかないだろう。

第二の説は、ㅏ (o) の円唇性 (合口性) の強さから、この文字でも[uo]を表し得たとする説 (濱田敦 1952、森田武 1977、趙焄熙 2001) である。いずれの論文も、韓国語の오 ('o) の円唇性の強さに注目し、当時の日本語のオがキリシタン資料の表記である *vo* と似たような特徴を持っていたと推測している。本論においてもこの説を支持する。

濱田敦 (1952 : 26-27) : ¹⁵

尤も朝鮮語の오 ('o) で表わされる母音は、少くとも現代京畿方言では、日本語のオよりも合口性が強いと云われて居り、従って오 ('o) で以て、吉利支丹が *uo* (*vo*) で表わした日本語のオを写したものと一往は考えられるかも知れない。然しながらその様に考えることは、むしろ逆に *uo* (*vo*) で表わされた当時のオが、現代語の[o]そのままではないかも知れないけれども、さりとてワと同じ子音を持つ[wo]程には摩擦が強くなかった、と云う結論になるかも知れないのである。但し朝鮮語では우 ('u) と오 ('o) との諺文が相互に結合することがない為に、厳密に[wo]を表わすべき方法が存在しないのであるが¹⁶。

森田武 (1977 : 257) :

朝鮮資料では、きまって[o]に近い오 ('o) があてであるが、これは日本語の[o]よりも合口性が強いと言われるので、ローマ字の *vo* で写した音を近似的に写したも

¹³ 日本語訳は引用者による。

¹⁴ 原文の the unit vowel /o/が「単母音 o」の意か、「ア行のオ」の意かは不明。

¹⁵ 原文の旧字体の漢字と旧仮名遣いは現行の形に直した。ハングルとローマ字転写のカッコの挿入は筆者。森田(1977)、趙(2001)、陳(2003)も同様。ローマ字転写法は、河野(1955)で統一する。

¹⁶ ㅜ ('uə) で[wo]の音を近似的に表すことは可能だった可能性はあるが、この点はこちらでは問題にしない。

のとも考えられる。

趙垺熙 (2001 : 133-134) :

「お」音にオ (’o) のみ見られることから、韓国語のオ (’o) と似ており、韓国語のオ (’o) を用いて発音しても自然に感じられたようである。しかし、韓国語のオ (’o) の場合は日本語のオより合口性が強いので[wo]であったことも考えられる。(中略)

以上のことから、「オ」の音価については、朝鮮資料以外では[wo]である唇音性が認められているが、朝鮮資料による場合、学習書に見られる音注は唇音性の強いオ (’o) であるが、「オ」に対するこの音注法は十五世紀から十八世紀まで変わらないのである。即ち、時代が降っても音声的に混同するほどの違いではないので、前代の表記法に従って表記したのであろう。

第三の説は、キリシタン資料の Vo、uo が実際の発音を表すというよりも規範性に基づく一種の文字転写であったとする説 (陳南澤 2003) である。

陳南澤 (2003 : 14-17) : ¹⁷

次の根拠から、15世紀より「オ」は[o]であった可能性が高いと考える。

1) 例は少ないが、15世紀の「日本紀行資料」で「オ」を「ㄷ (ə)」で写した例がある¹⁸。

おろの島 小呂の島 福岡 於路島 『海東諸國紀』(1471)

2) 『伊路波』の「オ」が「豆 (wo)」ではなく「ウ (’o)」で表記されている。「ウ」には「早 (wu)」が宛てられているから、「オ」が[wo]であれば「豆 (wo)」を用いたはず。

4)¹⁹ (3) 『キリシタン教義』(1592)で、O・Voを共に「オ」で受け止めている。

例 : Vontade (オンタアデ)、Oratio (オラシヨ)

4) はキリシタン資料の版本類におけるローマ字表記「vo」が「規範性」に基づいた表記 (一種の文字転写) である可能性をうかがわせる。

陳南澤(2003) が挙げた3つの根拠のうち、1) は例が少ない上、地名の聞き書きは正確性にも問題がある可能性があるから、根拠としては弱い。2) の『伊路波』の「ウ」の

¹⁷ 要約して引用する。

¹⁸ 18世紀のㄷ (ə) の例は時代が異なるので引用しない。また、長母音オオの表記を根拠とした記述も、短母音とは事情が異なるので、引用しない。1)の下線は著者。於路は어로 (’ə-ro)。

¹⁹ 原文3) と4) の(1)(2) は長母音の表記を根拠としているので引用しない。

音注について金順錦 (1987:92-93) は、イロハ歌を伝統的な読誦法で 7 音ずつに切ると「ウ」は第 4 行目の「らむうみのおく」(下線は筆者) でムに後続するので、「早 wu」はムに続いて読まれたウがこの音声環境で唇音同化したのを転写したものであろうと推測している。そうであれば、この表記は特殊なケースとして考察の対象外となる。4) の(3) については、ポルトガル語の **vo** と **o** の違いをカタカナで表記し分けることは無理なのではないだろうか。2 節冒頭で挙げたロドリゲス『日本大文典』の **vo** の綴り字の音の説明も無視できない。以上のことから、本論ではこの第三の説には否定的な立場を取る。

4. 『捷解新語』原刊本におけるオ段とウ段の母音交替例

前述のように、本論では、朝鮮語の ㅜ (o) の円唇性(合口性)の強さから、この文字でも [u] を表し得たとする見方に立つ。その根拠の一つとして、先行研究でも指摘されているオ段とウ段の母音交替現象があげられる。

オ段とウ段の母音交替現象は、キリシタン資料、国語資料に散見される。森田武 (1977: 257-258)、小林芳規 (1969: 66) には [o]→[u] の傾向が著しいとある。一部例を引用する²⁰。

1. [o]→[u]の例

『日葡辞書』Caimucu (皆目)、Cömuri (蝙蝠)、Cazoye,uru.Cazuye,uru. (数へ、ゆる)
Fimemosu,Fimemusu (終日)
「溺ウホ、レ」(理趣経開題保元元年点)
「弱ユハウシテ」(文選正安四年本)

2. [u]→[o]の例

『日葡辞書』Ayumu.Ayomu. (歩む)、Cunogui.Cunugui (櫟)
「やそらかならず (安)」(仮名書往生要集治承五年頃写)

『捷解新語』原刊本にも、以下の表 5 から表 8 に示すようなオ段とウ段の母音交替の例が見られる。参考として『捷解新語』改修本、『日葡辞書』、『大蔵虎明本狂言集』の例も表に挙げる²¹。交替例の平仮名に下線を引き、見出し語の左下に交替例の割合を分数で示す²²。また、表の下に原刊本の例文も示す。

²⁰ キリシタン資料は森田(1977)の例で、下線は筆者。仮名資料は小林(1969)の例で、下線は著者。

²¹ 重刊本は 1 例を除く全てが改修本の踏襲または削除であるため、省略する。改修本と異なる 1 例は注 24 で示す。

²² 分母はその語が原刊本に現れた延べ数、分子は母音交替例の数を表す。

【表5】オ→ウの例²³

	日本語	日葡辞書 (1603年)	虎明本狂言 (1642年)	原刊本 (1676年)	改修本 (1748年)
1	同じ (おなじ) 1/1	Vonaji.	おなじやうに ほむる： ながみつ	うなし 우나시 (’u-na-si)	おなし 오나시 (’o-na-si) ²⁴
2	一入 (ひとしお) 4/4	Fitoxiuo.	一しほさむう ござる： 船渡聲	① ひとしゆ 피도시유 pi-do-si-’yu ②③④ ひとしう 피도시우 pi-do-si-’u	①ひとしほ 히도시오 hi-do-si-’o ②ひと 히도 hi-do ③④ ひとしう 히도시우 hi-do-si-’u
3	遅なほる ²⁵ (おそなわる) 1/1	Vosonauari, ru,atta.	おそなわり まらした： 八句連歌	おそなおる 오소나오루 (’o-so-na-’o-ru)	おそなおり ²⁶ 오소나오리 (’o-so-na-’o-ri)

<原刊本の例文>

1. さけおうなしやうにこしめせとも (酒を同じ様にこしめせども) (3-16a)
2. ①ひとしゆめてたうこそそんすれ (一入目出たうこそ存ずれ) (6-5b)
②御ゆるしおひとしうたのみまるする (御許を一入頼みまるする) (9-16b)
③ひとしうたいけいにそんしたてまつり候 (一入大慶奉存候) (10-7b)
④ひとしうきえつつかまつり候 (一入喜悦仕候) (10-22a)
3. しゆつせんもおそなおるほとに (出船も遅なわるほとに) (6-16a)

²³ 「廻 (もとお)る」を「もとうる」とする例 (4-29a) もあるが、トの長音と考え、本論では扱わない。

²⁴ 重刊本は「おなし오나시’o-na-zi」。福島邦道 (1983 : 137-138) は、1591年加津佐版の『サントスの御作業』とマノエル・バレットによって同年に写された同じ書の写本で、版本 vonaji と写本 vnaji が4例続いてまったく対立していることを指摘し、「実際にあった発音と考えてもよい」(p.138:10)と述べている。

²⁵ ワ→オの例だが、母音の開口度が下がる点でオ→ウと共通した現象と考え、表に入れた。

²⁶ 重刊本は改修本を踏襲。

【表6】ウ→オの例

	日本語	1603 日葡辞書	1642 虎明本狂言	1676 原刊本	1748 改修本
4	悲しう ²⁷ (かなしう) 1/1	Canaxù.	かなしうござる： ぶあく	かなしお 가나시오 ga-na-si-'o	かなしう 가나시우 ga-na-si-'u

<原刊本の例文>

3. いかうかなしおそんしまるして(厳う悲しう存じまるして) (2-5a)

【表7】オ段→ウ段の例

	日本語 ²⁸	1603 日葡辞書	1642 虎明本狂言	1676 原刊本	1748 改修本
1	相もない (そうもない) 3/3	Yumenimo zonjenu. 夢にも存ぜぬ	きゝさうも なひ： 犬山伏	(あり) そむ なうそむノウ so-mu-no-'u	なし ²⁹
2	抑や抑 (そもやそも) 1/1	Somosomo.	そもやそも： うつぼざる	そむやそも そむ야수모 so- mu-'ya-so-mo	削除
3	上り(のぼり) 1/2	Noboricudari.	のほりくだり のたび人に： 文山だち	のふり(くだ り) 노부리 no-bu-ri	のほり(くだ り) 노보리 no-bo-ri
4	寛ぐ (くつろぐ) 6/7	Cutçurogui,u, oida.	くつろぎ ませう： 盗人の子	くつろぎ ³⁰ 구주롱기 gu-ju-run-gi	くつろけ 구즈롱계 gu- ju-ron-gyæi
5	過ぎす (すごす) 1/3 ³¹	Nomisugoxi,su.	おませ すごいて： やくすい	のみすくし 노미송구시 no -mi-sun-gu-si	のみすこし 노미송고시 no -mi-sun-go-si

²⁷ 「うれしう」「おかしう」「めつらしう」等、他のシク形容詞の連用形には交替例が見られない。この部分は異音を捉えたのであろう。

²⁸ 唇音、流音、軟口蓋音の順に配列する。1~3は両唇音だが、韓国語においては17世紀末に唇音下の母音 [i] の円唇化が完成したと推定されている(李基文著、藤本幸夫訳 1975: 228)。唇音と円唇母音ウの結び付きやすさを示しているようである。

²⁹ 「なし」は、修正の結果、交替例を含む語が取り除かれていることを示す。

³⁰ 7例中、連用形は3例。未然形は母音交替していない1例(1-20b)を含む4例。

³¹ 母音交替していない2例(2-6b)(3-19a)はいずれも「過ぎい〜」の形。

6	下戸 (げこ) 3/3	Gueco.	げこじやほど に：ひの酒	けく 계구 gyæi-gu	けこ 계고 gyæi-go
7	上戸 (じょうご) 1/1	Iōgo.	あかじやうご をしりながら ：ふじまつ	しやうく 쇼옹구 zyo-'uŋ-gu	しやうこ 쇼옹고 zyo-'uŋ-go

<原刊本の例文>

1. ありそむなうこそ御されとも (有り相も無うこそ御座れども) (1-7b)
2. そむやそもこしつそくいれたこうもくお (抑や抑、五十束入れた公木を) (4-15b)
3. のふりくたりのらんちやうのかいろうに (上り下りの難所の海路に) (8-12b)
4. こころやすくつるきまるするほどに (心安う寛ぎまるする程に) (5-20b)
5. ていしゆふりのさけおのみすくし、～ (亭主ぶりの酒を飲み過ぎし、～) (9-7a)
6. わたくしらわそうへつけくなれとも (私等は総別下戸なれども) (2-6b)
7. つしまにてもそなたわしやうくとききおよひまるした (対馬にても其方は上戸と聞き及びまるした) (1-18ab)

【表 8】ウ段→オ段の例

	日本語	1603 日葡辞書	1642 虎明本狂言	1676 原刊本	1748 改修本
8	印 (しるし) 1/1	Xiruxi.	都の <u>しるし</u> に：目近籠骨	しるし 시로시 si-ro-si	なし
9	残る (の <u>こる</u>) 3/5	Nocori, <u>u</u> , otta.	<u>のこる</u> 所に て： どちはぐれ	①② <u>のこる</u> 노고로 no-go-ro	① <u>のこる</u> 노 고루 no-go-ru ② <u>のこる</u> 노 고로 no-go-ro ³²
10	見苦しい (み <u>ぐる</u> しい) 1/2 ³³	Miguruxij.	<u>みぐる</u> しい 所へ： はぎ大名	みく <u>る</u> し 밍구로시 miŋ-gu-ro-si	みく <u>る</u> しい 밍구루시이 miŋ-gu-ru-si-'i
11	比類 (ひ <u>る</u> い) 1/1	Firui.	例なし	ひ <u>る</u> い 피로이 pi-ro-'i	なし

³² 重刊本では①は改修本と同じ、②は削除。

³³ 非交替例：うわきおみくるしないやうにこしらえまるせうか (上着を見苦しくない様に拵えまるせうが) (5-29ab)、改修本は原刊本と同じ。

12	少ない (すくない) 1/2 ³⁴	Sucunai.	すくなひも あらふまで よ：はぎ大名	すこなうて 수고노우데 su-go-no-'u-dyæi	すくなく 스구나구 su-gu-na-gu
13	含める (ふくめる) 1/2 ³⁵	Fucume, uru,eta.	ふくめてみ よ： しびり	(申) ふこめ 후고메 hu-go-myæi	(申) ふくめ 후구메 hu-gu-myæi
14	櫓 (やぐら) 1/1	Yagura.	やぐら： ひげやぐら	やこら 양고라 ('yaŋ-go-ra)	やくら 양구라 ('yaŋ-gu-ra)

<原刊本の例>

8. へちにしろしいたすこともなし (別に印致す事もなし) (8-3b)
9. ①しきのあいさつのころところなし (辞宜の挨拶残る所なし) (1-7a)
 ②たにんちうのまかないのころところもなし (多人数の賄残る所もなし) (7-4a)
10. はんしにみくろしことともあらは (万事に見苦しい事どもあらば) (6-24a)
11. ひろいなくめてたくそんしまるする (比類なく目出度く存じまるする) (7-22a)
12. ふなこうもすこなうて (船子も少なうて) (1-13b)
13. たいくわんとともに申ふこめ (代官どもに申し含め) (4-4a)
14. たかいにやこらのうえてておあけて (互いに櫓の上で手を上げて) (8-31ab)

表 5～表 8 に見る交替例の数をまとめると以下のようなになる³⁶。

- 表 5 (オ→ウ) : 3 語 6 例、非交替例なし
 表 6 (ウ→オ) : 1 語 1 例、非交替例なし
 表 7 (オ段→ウ段) : 7 語 16 例、非交替例は 3 語 4 例
 表 8 (ウ段→オ段) : 7 語 9 例、非交替例は 4 語 5 例

原刊本で全 18 語 32 例という数をどう考えるかは難しい問題だが、オ段とウ段の母音交替現象が起きていたことは確かであろう。そうであれば、17 世紀当時のウとオにはともに円唇母音という共通点があったと推測され、円唇性の強い韓国語のオ ('o) が [uo] を表し得るとする先の第二の説には信憑性があるように思われる。しかし、第二の説を

³⁴ 非交替例：ほしものもふたいろすくない (干物も二種少ない) (2-9a)、改修本：なし

³⁵ 非交替例：こまかに申ふくめすはならんから (細かに申し含めずばならんから) (4-28b)、改修本：なし

³⁶ 表 7 と表 8 に多いのはラ行とカ・ガ行である。ラ行は 4、8～11 の 5 例、カ行は 6、12、13 の 3 例、ガ行は 5、7、14 の 3 例である。

唱える先行研究では韓国語の音声的特徴から推測するに留まっている。そこで、本論では、朝鮮の中国語学習書である『翻訳老乞大』、『翻訳朴通事』の音注表記の検討を行い、第二の説に別の角度から新たな根拠を付け加えたい。

5. 中国語学習書の表記

『翻訳老乞大』上下巻、『翻訳朴通事』上巻³⁷は、朝鮮で中国語学習書として使用されていた書物で、ともに1506年～1517年頃に漢学者崔世珍が注解したものと推測されている³⁸。いわば『捷解新語』の中国語版で、中国語の本文に中国語音を表すハングル音注が付されている。

『捷解新語』と異なる点は漢字一文字一文字に対して二種類の音注が併記されていることである。遠藤光暁(2001:265-266)では、左の音注は『四声通解』(1517)³⁹の俗音、即ち申叔舟の『四声通攷』の俗音を表し⁴⁰、右の音注は、明朝の南京から北京への遷都により⁴¹、皇帝に従って多くの官人たちが北京に移り住み、当時の北京一帯で形成されて通用していた官話を反映するものと推測している⁴²。右の音注に関しては今後の検証が必要と断ってはいるが、今はこの説にしたがって、左は北京遷都以前の南方方言の性格を持った形を、右は遷都後の北方方言の影響を受けた官話の形を表すと考え、藤堂明保・加納善光編(2005)に見られる中古音から中世音への変化の流れと合わせて考えてみたい。

表9は、遠藤光暁(1990)の『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』の各漢字に付された音注のうち、右側の音注にㄷ(ɒ)が使われている例を中国語音の変化とともに示したものである。音注の右に示した3つの音声記号は中古音、中世音、現代語音(北京標準語音)である⁴³。中古音は六朝の首都、南京の言葉に基づく『広韻』(1008)に、また中世音は北方方言に基づく『中原音韻』(1324)⁴⁴に拠っている。便宜上、見つかった語から一部のみを挙げているが、韻目ごとの全語数は「撰・韻目」の最後の欄に示す。

³⁷ 原題に「翻訳」はないが、17世紀に出版された『老乞大諺解』(1670)・『朴通事諺解』(1677)等と区別して韓国の研究者はこのように呼んでいる。遠藤(2001:253)に拠る。

³⁸ 『朴通事上』(韓国慶北大学発行)の解題に拠る。

³⁹ 1517年刊行。『四声通攷』(南京語を基礎とする『洪武正韻』(1375)にハングルで音を付けた『洪武正韻訳訓』(1455)の抄本。申叔舟著。)等を崔世珍が改修したもの。

⁴⁰ 《翻译老乞大・朴通事》左侧音是“俗音”，《四声通解》也有“俗音”，这两者都来自申叔舟《四声通攷》的“俗音”，而不是崔世珍亲自描写的。(遠藤光暁 2001:265)

⁴¹ 1421年に遷都。

⁴² 到了1420年，首都从南京迁移到北京，想必那时有相当多的官民伴随皇帝来北京。我认为《翻译老乞大・朴通事》右侧音反映的是来自南京而当时通行于北京一带的官话。当然，这个设想还需要由今后大量的研究来检验。(遠藤光暁 2001:266)

⁴³ 記号はIPAに統一した。

⁴⁴ 元・明代の北方系の口語体系を表し現代北京語に近いとされている韻書。

【表9】中国語学習書の音注⁴⁵

漢字 ⁴⁶	撰・韻目	開合・等	音注 ⁴⁷	中古音	中世音	標準語
1 多	果・歌	開口・一等	더(də) 도(do)	ta	tuo	tuo
2 羅	〃 9	〃	러(rə) 로(ro)	la	lo	luo
3 我	果・哿 2	〃	어(ə) 오(o)	ŋa	o	uo
4 騾	果・戈	合口・一等	러(rə) 로(ro)	lua	luo	luo
5 倭	〃	〃	휘(?uə) 오(o)	?ua	uo	uo
6 禾	〃 10	〃	꺠(hhuə) 호(ho)	fua	ho	hɣ
7 果	果・果	合口・一等	꺠(guə) 고(go)	kua	kuo	kuo
8 朶	〃	〃	더(də) 도(do)	tua	tuo	tuo
9 鎖	〃	〃	쉬(suə) 소(so)	sua	suo	suo
10 坐	〃 9	〃	꺠(jjuə) 조(jo)	dzua	tsuo	tsuo
11 糲	果・過	合口・一等	너(nə) 노(no)	nua	nuo	nuo
12 課	〃	〃	꺠(k ^h uə) 코(k ^h o)	k ^h ua	k ^h uo	k ^h ɣ
13 唾	〃	〃	터(t ^h ə) 토(t ^h o)	t ^h ua	t ^h uo	t ^h o
14 破	〃 9	〃	꺠(p ^h uə) 포(p ^h o)	p ^h ua	p ^h uo	p ^h uo
15 活	山・末 7	合口・一等	꺠(hhuə?) 호(ho)	fiuat	huo	huo
16 落	宕・鐸	開口・一等	랄(rav) 로(ro)	lak	lo	luo
17 薄	〃	〃	꺠(bbav) 보(bo)	bak	po	po
18 昨	〃 9	〃	꺠(jjyav) 조(jo)	dsak	tso	tsuo
19 樸	江・覺	開口・二等	붕(bu?) ⁴⁸ 보(bo)	p ^h ɔk	p ^h o	p ^h uo
20 卓	〃 4	〃	꺠(꺠 ⁴⁹) 조(jo)	tɔk	tso	tso

⁴⁵ 藤堂明保・加納善光編 (2005) で音変化が調べられなかったのは次の9語である。入力できない漢字は「走朶」のように2文字で表示する。〈果撰4語：走朶・婆・馬果・和(過韻)／山撰1語：聒／宕撰2語：莫・月乞／臻撰1語：李頁／江撰1語：涿〉

⁴⁶ 韻目毎に音注の가나다라順で配列した。

⁴⁷ 音注に付された声点は省略する。声門閉鎖音ㅍと有気音ㅍ히ㅍ의のローマ字転写については、河野六郎(1952:33)の表記法ではなく、IPAのʔ、^hを使う。

⁴⁸ 『翻訳老乞大』の2例中1例は꺠 bav

⁴⁹ New Batang の特殊文字に (joav) がなかったので2文字に分けたが、꺠 (v) は下に付く。

表9について藤堂明保編(1978:1571-1583)に基づいて説明すると、果撰⁵⁰は韻尾(末子音)を持たない音である。主母音は開口(直音)と合口(介音uを持つ母音)に分かれる。等は母音の開口度を表し、一等と二等は直音、三等と四等は拗音である。表9に見られる一等は奥寄りで広く、二等は前寄りで一等よりも狭い。韻目は声調を表すが⁵¹、本論の議論では声調は考えず、音注の声点も省略する。15番以降は入声⁵²で、山撰はt、宕撰と江撰はkを韻尾に持つ。

表9の「撰・韻目」の数字を見ると、ㄊ(o)の例が最も多いのは果撰合口一等の28語で(10+9+9)、その他、果撰開口一等に11語(9+2)、山撰に7語、宕撰に9語、江撰に4語ある。

藤堂明保編(1978:1587-1589)によると、北宋の開封から南宋の杭州に都が移り⁵³、北方から多くの人々が杭州に移動した影響を受け、14世紀の杭州語は江南訛りが磨滅し、「中原の音⁵⁴」と似た体系を持つに至ったとされる。その特徴の一つとして、『広韻』(1008)に見られた広いアを含む韻母がㄨ(オ)に変わってきたことが挙げられている。たとえば歌ka→kㄨ、果gua→guㄨである。さらに『広韻』と『中原音韻』(1324)の対比では、歌a→o、戈ua→uoが挙げられている。

その流れを念頭に置いて表9の合口の音注を見ると、例えば7番の「果」の左側の音注ㄨ(guㄨ)は中古音の広い[a]から中世音の[o]へと変化する中間の[guㄨ]のような音を表し、ㄊ(go)の方は現代北京語と近い中世音[guo]を表している。このことから、「ㄨ(guㄨ)ㄊ(go)」は「-uㄨ→-uo」という音変化を表していると推測される。5、6、9、10、12、14、15番も同様である。ただし、dentalな子音であるt,t^h,l,nの左の音注だけは、ㄨ(uㄨ)ではなく非円唇母音「ㄨ(ㄨ)」で表記されている(4、8、11、13番)。この理由は不明である。中国語の方は中古音も中世音もuの介音が含まれているので、韓国語の方にdentalな子音にㄨ(uㄨ)が使いにくい事情があったのかもしれない。

次のページの表10は、合口の果撰と山撰入声の音注「ㄨ(uㄨ)ㄊ(o)」に「-ua→-uo」が想定される語と「-ua→-o」が想定される語の割合を示したものである。左の音注にㄨ(ㄨ)が使われた語は□で囲む。騾、朶、朶、糯、惰、唾の6語である⁵⁵。果撰合口の-ua→-uoは全20語だが、□の6語を除くと14語となり、果撰合口全体の74%を占める。また、山撰入声合口の-ua→-uoは全5語で、山撰合口全体の71%を占める。

⁵⁰ 撰は「主母音+韻尾」の別で分けたグループ。

⁵¹ 平声：歌・戈／上声：哿・果／去声：過／入声：末・鐸・覺

⁵² 入声は中古音の韻尾にp,t,kを持つ語である。入声の撰は同じ調音点の鼻音を韻尾に持つ。活は山撰(tとn)、薄は宕撰(kとŋ)、樸は江撰(kとŋ)である。

⁵³ 1127年に南宋が杭州で再興。

⁵⁴ 当時華北・華中の広い地域にわたって話されていた共通語。

⁵⁵ 山撰の「脱」はdentalな子音だが、左の音注にㄨuㄨが使われている。

【表 10】「ㄷ (uə) ㄷ (o)」に想定される「-ua→-uo」と「-ua→-o」の割合

	音変化	語数	漢字	割合
果 合	-ua→-uo	14	[戈] 鍋、騾、倭、和 [果] 果、裹、朶、朶、鎖、坐、跛、火 [過] 過、糲、惰、座、課、唾、破、貨	74%
	-ua→-o	5	[戈] 磨、波、科、婆、禾	26%
山 合	-ua→-uo	5	[末] 澆、沫、脱、豁、活	71%
	-ua→-o	2	[末] 鉢、抹	29%

前述のように、『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』に見られる2種類の音注のうち、左側は14世紀頃使われていた、北方の影響を受けた南方方言の官話を表し、右側は15世紀の北京遷都以降使われていた、北方方言の性格の強い官話を表しているとされている。右側の音注にㄷ (o) が使われているのは、果摂と、入声の山・宕・江摂である。なかでも合口の果摂と山摂の音注には「ㄷ (uə) ㄷ (o)」の組み合わせが多いが、これらの音注の7割以上は中国語音の「-uɑ→-uo」という変化を表していると推測される。以上のことから、中国語学習書の右側の音注ㄷ (o) は、果摂と山摂入声の合口一等では少なからず [uo] を表していると言える。

では、なぜハングル音注の制作担当者は中国語の [uo] にㄷ (o) を使ったのであろうか。それは、彼らが注目したのが二重母音であるか否かではなく、母音の円唇性だったからではないかと考える。そのため、中国語学習書で [uɑ] の音にはㄷ uə を、[uo] の音にはㄷ (o) を、と表記し分けたのではないか。もしも二重母音であるか否かの方が重要であれば、二重母音 [uɑ] [uo] には両方ともㄷ uə を当て、単母音 [o] にだけㄷ (o) を当てていたはずである。しかし、円唇性の方に注目すれば、[uo]は[uɑ] よりもむしろ [o] のグループに近いと考えたのかもしれない。

このように中国語学習書で[o]だけでなく[uo]にも音注ㄷ (o) が使われていたのであれば、同じ司訳院⁵⁶で制作出版された日本語学習書に同様の方法が取られた可能性があるだろう。結局、音注ㄷ (o) はその円唇性の強さから、日本語のオが二重母音であろうとなかろうと、オの音注として使われ続けたものと思われる。

6. おわりに

本論では、キリシタン資料では二重母音 vo、uo で表された日本語の母音オが、『伊路波』や『捷解新語』原刊本などの朝鮮資料ではㄷ (o) で表記されている理由について検討した。先行研究にはㄷ (o) が表す円唇性(合口性)の強さから、この文字でも [uo] を表し得たとする説(濱田敦 1952、森田武 1977、趙燭熙 2001)があるが、本論では、

⁵⁶ 朝鮮で外国語教育を推進していた機関。注8参照。

キリシタン資料や仮名資料同様、原刊本にも見られるオ段とウ段の母音交替現象に加え、新たに中国語学習書に見られる音注の検討結果からもこの説の正しさが確認できることを示した。

参考文献

- 李康民 (1991) 「『捷解新語』の成立と表現」『国語国文』60-12、pp.33-57、京都大学国文学会
- 李基文著、藤本幸夫訳 (1975) 『韓国語の歴史』大修館書店
- 遠藤光暁(1990) 「凡例」『《翻譯老乞大・朴通事》漢字注音索引』、pp.iii-v、好文出版
- (1984) 「《翻譯老乞大・朴通事》里的汉语声调」『語言学論叢』13、商務印書館、北京 (遠藤 2001、pp.253-266 に再録)
- (2001) 『中国音韻学論集』白帝社
- 金順錦 (1987) 「朝鮮板『伊路波』の注音法」『月刊言語』7月号、pp.89-96、大修館書店
- 河野六郎 (1952) 「『伊路波』の諺文標記に就いて—朝鮮語史の立場から—」『国語国文』21-10、pp.33-40、京都大学国文学会 (河野 1979、pp.397-406 所収)
- (1955) 「朝鮮語」『世界言語概説 下巻』、pp.358-439、研究社
- (1979) 『河野六郎著作集 第1巻』平凡社
- 小林芳規 (1969) 「日本語の歴史 中世」『国文学解釈と鑑賞』34-14、pp.47-77、至文堂
- 趙燭熙 (2001) 「第4章 母音表記」『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』、pp.84-136、J&C、ソウル
- 陳南澤 (2003) 「第2章 日本語における母音の変遷」『朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究』(東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻言語学専門分野博士学位論文)、pp.14-49
- 藤堂明保編 (1978) 『学研漢和大辞典』学習研究社
- 藤堂明保・加納善光編 (2005) 『学研新漢和大辞典』学研教育出版
- 外山映次 (1972) 「近代の音韻」『講座国語史2 音韻史・文字史』、pp.173-268、大修館書店
- 中山めぐみ (1998) 「『捷解新語』におけるハングル音注について—ハ・カ・ガ・タ・ダ・バ・パ・サ・ザ行および母音オ・エに関する考察」麗澤大学大学院言語教育研究科修士論文
- (2000) 「『捷解新語』原刊本のハングル音注—ハ行・母音オおよびエ段について—」『麗澤大学大学院言語教育研究科年報』第2号、pp.13-32
- 濱田敦 (1952) 「弘治五年朝鮮板『伊路波』諺文対音攷」『国語国文』21-10、pp.22-32、京都大学国文学会 (濱田 1970、pp.77-88 に再録)
- (1970) 『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店

福島邦道 (1983)「第10章 音韻史とのかかわり」『続キリシタン資料と国語研究』、pp.133-145、笠間書院

森田武 (1977)「音韻の変遷 (3)」『岩波講座日本語 5 音韻』、pp.253-280、岩波書店
Cho, Seung-bog (趙承福) (1970). *Vocalism. A phonological study of Early Modern Japanese. On the basis of the Korean source-materials. II*. Stockholm oriental studies, 9. pp.1-87, Almqvist & Wiksells, Uppsala.

資料

<キリシタン資料>

土井忠生、森田武、長南実 (1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店
ロドリゲス、ジョアン原著、土井忠生訳註 (1955)『日本大文典』三省堂

<朝鮮資料 (日本語学習書) >

香川大学開学十周年記念「伊路波」刊行委員会編 (1959)『伊路波』
京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1957)『捷解新語』京都大学国文学会
——編 (1960)『重刊改修捷解新語』京都大学国文学会
——編 (1987)『改修捷解新語 本文・国語索引・解題』京都大学国文学会

<朝鮮資料 (中国語学習書) >

遠藤光暁 (1990)『≪翻譯老乞大・朴通事≫漢字注音索引』、好文出版、東京
慶北大學校大學院國語國文学研究室 (1959) 國語國文資料集 (第四輯)『朴通事上』、大邱
京城帝國大學法文學部 (1943) 奎章閣叢書第八『朴通事諺解』、ソウル
中央大學校大學院 (1972)『翻譯老乞大卷上』中央大學校出版局、ソウル
仁荷大學校附設人文科学研究所(1975)『翻譯老乞大卷下』仁荷大學校出版部、仁川

<国語資料>

池田廣司、北原保雄 (1972)『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇上』表現社
——、—— (1973)『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇中』表現社
——、—— (1983)『大蔵虎明本狂言集の研究本文編下』表現社

付記

本論を執筆するにあたり、昨年7月1日に逝去された故梅田博之先生にご指導をいただきました。長年にわたりご指導くださったことに、今改めて心から感謝申し上げます。